

認知症の妻と介護者の夫の「自己決定」を どうとらえ、支えればよいのか

● スーパーバイザー ●

奥川幸子（対人援助職トレーナー）

● 事例提出者 ●

Tさん（居宅介護支援事業所）

● クライアント ●

Mさん・女・61歳

● 事例の概要 ●

9歳年上の夫とふたり暮らし。子どもはおらず、休日にはドライブに出かけたり、夫婦で過ごす時間も多く、定年後は気ままに旅行へ出かけてのんびり過ごそうと楽しみにしていた。

夫が定年して半年（平成14年）、Mさんの物忘れが目立つようになった。数字が数えられなくなったのでスーパーの仕事を辞めた。夫とともに病院を受診したところ、若年性のアルツハイマーであることがわかり、投薬を開始する。徐々に進行していきながらも、夫の介護のもと、介護保険によるサービスを使いながら在宅生活を続けていた。

平成18年1月頃より精神的に不穏な状態と夜間の不眠が続き、介護に疲れた夫の体調も不安定となる。3月、「もう限界です……」という夫の電話から施設へ生活の場を移すことになる。

● 既往歴 ●

特に大きな既往症はなく、時々風邪をひく程度で健康であった。

● 現在の状態 ●

I ADL：夫が全般的に行っている。

ADL：尿・便意はあるが言葉では表現できない。そわそわした様子を見て声かけし、介助にて排泄している。入浴、食事、着替えは全介助。

● 身体・精神の状況 ●

ほぼ寝たきりの生活であり、車いすやトイレへの移乗も全介助となっている。自発的な発語はほとんどないが、こちらからの声かけには反応する。

精神障害者手帳1級、要介護5

● 家族の状況 ●

夫は平成15年に胃がんの手術をしており、1年間抗がん剤治療を行っていた。不整脈があり、心房細動の発作を年に数回起こしている。

● 紹介の経路 ●

クライアントの住居から最寄り駅までの道中に当事業所があるため、以前から存在を知っていたとのこと。平成15年1月、夫が一人で来社され、事例提出者が対応する。援助が始まってからは同僚のケアマネジャーが担当となる。1年後、担当者の退職に伴い、引き継ぐこととなった。



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

● 前任者からの引継ぎ後の初回面接 ●

平成16年1月某日 午前10時、自宅を訪問。

T：こんにちは。Tです。

夫：狭いところですが、こちらへどうぞ。

（奥の居間へ通してくれる。3DKの室内は片付いており、テーブルや椅子がきちんと並べられている。M子さんはすでに夫の隣の席へ座っていた）

T：M子さん、はじめましてこんにちは。私は〇〇事業所のTと申します。よろしくお願いします。

Mさん：お願いします。（表情は硬く、夫の顔を見ながら話す）

T：私は初めてご主人が窓口にお越しくださったときにお話を伺わせていただいたものです。

夫：そうでしたね。よく覚えています。

T：その後のご様子は前任者からも引き継いでおりますが、また再度お伺いすることもあるかと思いますが、よろしくおねがいしますね。

夫：はい。私としても何でも知っておいてほしいと思っておりますので遠慮なく聞いてください。な、M子（と妻の顔を見る）。最近は風呂に入るのが大変になってきていて、私も体力的に十分といえないのです。これから暑い時期になりますので、どなたかお手伝いいただけないでしょうか？

T：現在、ご主人はどのようなお手伝いをされているのですか？

夫：順番を教えればだいたい自分でできますが、まったく一人にしておくのは心配ですね。

T：今まではヘルパーさんのご利用が主だったようですが、いかがですか？

夫：M子はヘルパーさんととても気が合っているの

です。友達のようにも見えますよ。入浴もぜひ、ヘルパーさんに手伝ってもらいたいと思っています。

T：M子さん、いかがですか？

Mさん：いいよ。

T：では、今入っていただいているヘルパーステーションと相談してみますね。

夫：そうそう。M子は今、要介護2なんですけど、もう少し悪いような気がします。介護保険は途中で申請できるのですか？

T：はい。それは大丈夫ですが、現在のご様子を少し聞かせていただけますか？

夫：いいですよ。

T：お食事はおいしく召し上がれますか？

夫：M子はなんでもよく食べてくれるから助かる。ヘルパーさんがつくってくれたものもおいしいみたいです。私も料理をしますしね。

T：ご主人は以前からお料理をされていたのですか？

夫：M子も働いていたし、家事は一応なんでもできますよ。今は一緒にやっています。

T：頼りになるご主人ですね。

Mさん：（笑顔で） そうだね。

T：お手洗いに困ったことはありませんか？

夫：それは問題ないので助かっています。こちらがだめになったら私では面倒みれませんよ。……ただ、何をするにも一緒にないとだめです——。

この後、ヘルパーさんと散歩を楽しみにしていることや、近所のお付き合いはほとんどないことなどを話す。次回の受診時に同行させてもらうことを約束して辞去した。

夫はたいへんきちんとした印象でメモを細かく取

りながら質問されていた。Mさんは下を向いたまま黙っている時間が長く、夫にまかせているようにも感じた。Mさんは実際の年齢よりも若く見えた。その上10歳近く年が離れていればご主人もかわいい妻なのだろうな、と考えながら帰った。

希望通りヘルパーの手配を行い、週6回の散歩と家事（調理）の援助に加えて週2回の入浴介助を受けることになった。介護保険の変更申請の結果は要介護3との通知がきた。

平成16年3月

S病院へ定期受診。同行させてもらう。担当のJ先生は穏やかでよく話を聞いてくれた。先生は「Mさんはまだ人を認知する力が残っている。今のうちに自宅以外にも楽しみや安心して過ごせる場所を作っておいたほうがよいでしょう」と話された。私も大きくなすいたが、夫は「そうですね……」とあいまいな返事をしていた。

4月

夫はがんの再発はないものの、心房細動の発作のため体調の悪さを訴えることも多くなっていた。夫の休養のためにも施設サービスの利用が必要ではないかと思った。しかし、夫は「M子はそういうところは合わないし、ヘルパーさんだけで十分だ」と聞いてくれなかった。

12月

隣の市で介護者が要介護者を殺害するという事件がおこった。新聞に載ったその記事を夫はノートに貼っていた。「私はこの人の気持ちわかります」と静かに訴えられ、私は言葉が出なかった。この頃から、今までも感じていたこの家庭の今後の不安をさらに強く感じるようになった。

平成17年2月

夫が椎間板ヘルニアのため手術が必要となった。夫はしかたなくMさんをショートステイに預けることに同意した。事前に十分な打ち合わせを行った結果、無事に過ごすことができた。Mさんも職員に慣れたため、以後ヘルパーの援助に加えて定期的にショートステイを利用することになった。

7月

認知症の進行がすすんできた。介護保険の変更申請を行い、要介護3から要介護5になった。食事は口に入れたものをどうしてよいかわからないため、いつまでも口の中に溜め込んでいる状態だった。時々、不穏な状態が出現するようになった。

平成18年2月

不穏に加えて、夜間の徘徊が頻繁になってきた。夫も睡眠不足が続き、体調も悪くなってきた。日中の不穏がますます夫を苦しめていった。

3月某日

夫が疲れた表情で来社される。

夫：いろいろすみませんね……。

T：とんでもありません。ご主人の体調は大丈夫ですか？

夫：なんと言っているかわかりませんが、気が張っているのと疲れたのを繰り返しているみたいです。M子は相変わらず寝てくれません。薬もJ先生に相談して2回ほど変えてもらいましたが、あまり変わりません。先日は「ばあちゃんの家に行く」と言って外に出ようとしてました。

T：そうですか。Mさんがもう少し落ち着けるとよいのですが……。

夫：今週、病院へ連れて行って先生と相談したいと思います。

T：わかりました。その時は私も同行させていただいてよろしいですか。

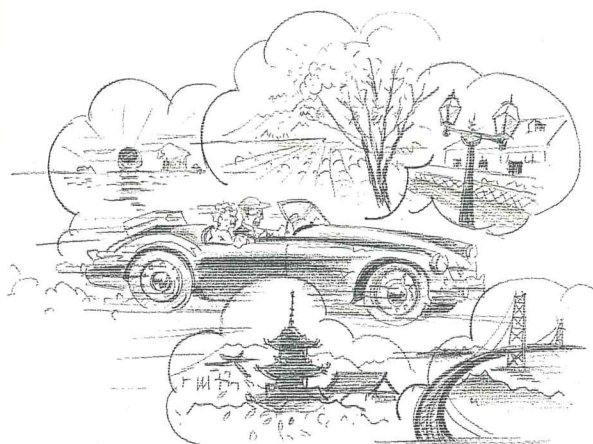
夫：はい。ぜひお願いいたします。

T：ショートステイはどうしますか？

夫：本当は何泊でもしてもらいたいぐらいですが、今の状態ではだめですので、しばらくやめにしてください。

T：ご主人のお疲れが心配ですが、しばらくそうしましょう。

夫：本当に疲れましたよ。どうにでもなれという気持ちになります。私は貧乏で育ちました。兄と弟がいました。兄は45歳で胃がんで亡くなり、弟は兄弟でパンを分けあいながらやっと税理士になったのに、すぐに脳腫瘍で亡くなってしまいました。亡



くなるときの無念な表情は今も忘れられません。だから私は生きることにはしているのです。このまま終わるわけにはいかないのです。

T: そうでしたか……私もご主人の人生も大切にしたいと思っています。

夫: お世話になります。

それから3日後――。

約束していたS病院の受診日だった。8時30分、夫より電話で「もう限界です……。今日は家には連れて帰れない。昨夜も断続的に起きていて私もほとんど寝られていない。なんとかしてください」との訴え。ショートステイの手配をし、夫へは「先生へ相談してみましょう」と話す。タクシーにてM子さ

んと夫、ヘルパー、私の4人で病院に向かった。夫は助手席に乗って運転手さんに行き先を伝え、声を上げて泣き始めた。

S病院にて主治医へ最近の様子を説明する。先生からは薬を変えていく具体的な方法の提案があった。しかし夫は、在宅は限界であること、入院させてほしいことなどを訴えた。しかし、どこの病院も今日すぐに対応するのは難しく、確保しておいたショートステイを利用することとなる。

その後、以前見学へ行った特別養護老人ホームより、ショートステイの空きがあり、そのまま入所できそうだと連絡が入る。主治医に相談すると、施設入所を強く推され、今後も医療面はJ先生に見てもらえることになった。

● 考察 ●

私は夫の決定をMさんの自己決定として対応していたが、本当にそれでよかったのだろうか。また、事例を書いていくうちに、夫の本心を聞いた時期があまりにも遅いことに気づいた。夫の生きることへの執念に近い強さは、私が担当した2年の間無視されていた。気づかなくてはいけない時期はいつだったのか、どの時期がターニングポイントとなっていたのか、一緒に検討していただきたい。

ケース検討会

検討課題の設定

奥川 ありがとうございます。この事例は現在も継続しているケースですね？

Tさん はい。今はショートステイに入られていますが、契約は継続しています。

奥川 Tさんは事例報告のなかで2つ問題を挙げているように見えます。1つ目は、自己決定に関してです。夫の決定イコール妻の自己決定と考えていた。この点については、今はどう考えていますか。

Tさん 援助の途中から夫の決定がイコール妻の自己決定ではないと感じていたような気がします。

奥川 そう感じ始めたのはいつ頃ですか？

Tさん 平成17年の夫の入院の後ぐらいからです。

奥川 夫に対して、「奥さんは違う意向をもっているのではないかと確認したことはありますか？

Tさん はい。でも、いつも「自分はM子のことを一番わかっている。妻の思いはこれがすべてです」と言われ、先に進むことができませんでした。

奥川 そうすると、今日の課題としてはどんなこ

とを検討したいですか？

Tさん ご主人のバリアを突破するためにどんな方法をとることができたのか、皆さんに教えていただければと思います。

奥川 わかりました。それともう1点、ご主人の本音を聴けた時期が遅すぎたと感じていますね。

Tさん はい。最後の最後に生に対する執念をお聞きして、もしかするとそれまでのことは本当の自己決定ではなかったのではないかという気がしました。どうして本音を聴くのがこんなに遅くなってしまったのかがずっと引っかかっています。

奥川 では、今日のテーマは、このご夫婦をセットとして考えたときに自己決定をどのように考え、どんな点を押さえればよいのか。また、夫が本音をギリギリまで言わなかったのはどうしてか、逆に言えば、どうすればもっと早く聴かせていただくことができたのか。この2点でよろしいですか？

Tさん はい。よろしくお願いします。

面接の急所にどう対応するか

奥川 では、まずはこのご夫婦の生きている世界を理解するためには、どのようなことをもう少し確認する必要があるでしょうか。状態像を理解するための情報をTさんから引き出してください。

発言 ご本人の現在の状態とこれまでの変化の様子を教えてください。

Tさん 平成17年を境に能力がガクッと落ちていきます。それまでは歩行も可能で排泄も訴えができていたので失禁等はありませんでしたが、平成17年あたりから座り方やズボンの上げ下ろしのしかたなどがわからなくなってきました。知的能力は、人の顔の判別や一回で人の顔を覚えたりといったことはできています。ただ、話の前後を取り違えたりすることが17年以降顕著になりました。

発言 当然、介護量も増えているわけですね。

Tさん はい、そうです。

発言 ご主人の身体の状態、特にがんの部位や程度、予後などはわかりますか？

Tさん すみません、細部は把握していません。

発言 ご夫婦のなれそめはわかりますか？

Tさん ご主人が38歳、奥さんが29歳のときに結婚しています。ご主人が事務機器のメンテナンスをしていた会社に奥さんが勤めていたそうです。

発言 介護が始まるまでの夫婦関係はどのようなものだったかわかりますか？

Tさん お子さんがいらっしゃるいませんでしたので、ずっと2人で仲良くしてこられたようです。ご主人は車が好きな方で、あちこちドライブに出かけたという話をうかがったことがあります。

発言 ご主人は若年性アルツハイマーについて、どの程度理解されていたと思われますか？

Tさん 直接的にその点を問いかけたことはありません。ただ、奥さんの受診には毎回付き添っていましたし、メモの取り方などを見てもよく勉強していらっしゃるな、という印象はありました。

奥川 今の質問は何が知りたかったのですか？

発言 若年性のアルツハイマーでは、どうしても徘徊や夜間不穏などの周辺症状が発生することが多いと思うのですが、ご主人は先行きをどのように認識していたのかを知りたいと思いました。

奥川 大事な点です。担当を引き継ぐとき、Tさんのなかではそういう観点はありましたか？

Tさん 正直、私自身は先々のことまで考えて面接はしていませんでした。ご主人は周辺症状への



意識がどこまであったかはわかりませんが、「排泄が自力でできなくなったら自分はお手上げなので、家ではみれない」とおっしゃっていました。

奥川 そうですね。そのご主人の言葉を受けて、ふつうなら、「では、排泄がだめになったらご主人が介護をするのは無理だろうとお考えなのですね」と確認をしたり、「その場合、施設にお預けになるようなことを考えていらっしゃるのですか?」と意向を聞いたりしますよね。

Tさん はい。

奥川 ところが、ここではTさんはそういったことをしていません。今、振り返ってみて、それはどうしてだと思いませんか?

Tさん ご主人がすべてを決めていて、こちらの入るスキがないというか、バリアを張られているような感じで、突っこめませんでした。

奥川 どういうバリアですか?

Tさん 「M子のことは自分が一番よくわかっている、あなたにはわからないよ」というようなバリアを感じていたと思います。

奥川 ご主人の無言のメッセージを受けとって、思わず引いてしまったんですね。

Tさん はい。

奥川 クライアントの存在に圧倒されてしまう。これは援助のなかではよくあることです。しかもご主人は介護殺人の記事を切り抜いて、「この人の気持ちが私にはわかります」と言っています。この言葉を聞いたときはどう感じましたか?

Tさん 「そんな自分の気持ちをあなたは理解していない」と言われているように感じました。

奥川 それで余計にすくんでしまったんですね。

Tさん はい……。

奥川 ですが、ここは大切な場面ですので、どんなふうにご主人の言葉に応じることができたかを考えてみましょう。ご主人は、「排泄がだめになったら私では面倒みれませんよ」と言った。しかし、そのすぐ後で、「ただ、何をするにも一緒にないとだめです」と言っています。一つの面接のなかには、ここは必ず押さえておかなければいけな

いという急所があります。こういうアンビバレントなことを相手が言ったときは、絶対にそのままにしてきてはいけません。この場面、皆さんだったらどう応じますか? ちょっとロールプレイをしてみましょう。Tさんが書いてくださった逐語録の最後の3つぐらいのやりとりをロールプレイしてください。Tさん役の方は、ご主人の最後の言葉に自分だったらどう返すのか。ご主人役の方はその言葉を受けてどう感じたか、感想を話し合ってください。

●約10分間、ロールプレイが行われる。

奥川 いかがでしょう。まず、どのようにご主人の言葉を受けとめますか?

発言 ご主人が「何をするにも一緒にないとだめです」とおっしゃったら、「ご主人は奥様をととても愛していらっしゃるんですね」とか「Mさんはご主人をととても頼っていらっしゃるんですね」とか「おふたりは本当に仲がよろしいんですね」というように受けとめたいと思いました。

奥川 二人の絆、そしてご主人が奥さんを大切にしていることを保証するわけですね。いいですよ。ほかにはいかがですか?

発言 「ご主人はととてもきめ細かく配慮をして介護をされてきたんですね」と受けてはどうでしょう。

奥川 ご主人がこれまでしてきた行為、胃がんになっても奥さんの介護をしっかりとされてきたことを認める。これも承認ですね。どちらも大切なことです。「ご主人がしていること、そしてその動機となっている奥様との絆、それを私は理解しています」というメッセージを送ることで。このご主人にとって「自分が介護できなくなったとき、どうするか」を問われるのは、相当にきついことです。そういうきつい質問をする前には、必ず相手を手当てする必要があります。なぜなら、私たちがお目にかかるクライアントの方たちは、ふだんより苦しみを背負っていらっしゃるからです。そして、これは自己決定をしてもらうための土壌

づくりになります。自己決定というのは、いきなりできるものではなく、自分の人生をきちんと見つめ、自分の身体のこと考え、行く末について判断していただく必要があります。高齢になり、苦しみを背負っている身にとってはつらい作業です。だからこそ、手当てが必要になるのです。もちろん、手当てといっても決してお世辞やお愛想ではなく、本当のことを言えばいいのです。このご主人は、自分もがんを患いながら奥様のことをみえています。平成16年の時点でも、かなりの極限状況だったでしょう。

Tさん その当時は、とてもそんなふうには考えられませんでした。

奥川 今だったらどんな言葉で受けとめますか？

Tさん 「M子さんを本当に大切に介護されてきたんですね」という言葉から始めたいと思いました。

奥川 その言葉をかけていれば、どうなったと思いますか？

Tさん もしかしたら、ご主人のバリアが少し崩れたかもしれない――。

奥川 そうですね。認めてもらうというのは、人間にとってとても大事なことです。ご主人は、ほころびを見せるというかたちで一生懸命にメッセージを送っているんですね。

Tさん はい――。

奥川 では、なぜここで今のような言葉を言えなかったのでしょうか。この点はどうですか？

Tさん ご主人のバリアもたしかにあったとは思いますが、よくよく振り返ってみると、私のなかにご主人を手当てする気持ちがなかったからだと思います。奥さんのことを何でも自分ひとりで決めているご主人に対して、嫌悪感をもってしまったんです。「奥さんを大切にしていってほしいですね」というようなことを、一度も口にしたことがありませんでした。

奥川 よく自分の気持ちを振り返りましたね。Tさんはきっと自立心が強い方なのでしょう？

Tさん はい――。

奥川 ここが相互交流で行う対人援助の怖いところ

です。ご主人だけではなく、援助者のほうもバリアを張ってしまっていた。だから、途中でおかしいと思っても、軌道修正できずに時間が経ってしまったわけです。今考えると、軌道修正ができなかった原因はどこにあったと思いますか？

Tさん 私自身が、ご夫婦の関係性をよく理解できていなかったからだと思います。

奥川 そうですね。一応、輪郭は聞いていますが、どのような関係性のなかで生きてきて現在に至っているのかを、お二人の内面に即して理解することが、ちょっとできていませんでした。

Tさん はい――。

奥川 ご夫婦の内面をどう理解すればいいでしょう。どなたかおっしゃっていただけませんか？

発言 ご主人からすれば、自分の定年後は10歳年下のかわいい奥様とゆっくり生活を楽しもうと、いろいろな夢を描いておられたと思うのです。ところが、その矢先に奥様がアルツハイマーに襲われ、描いていた夢が壊れてしまった。その寂寥感はとても深いものだったろうと思います。先ほどロールプレイをした場面などで、その寂寥感への手当てができていれば、その後の援助もスムーズにいったのではないかな、と思いました。

奥川 そのとおりですね。援助職者は熟練していけばいくほど、今おっしゃっていただいたようにクライアントの内面を深く理解することができます。その理解の深さに応じて、援助職者の言葉も変わり、クライアントにより届くようになります。このご主人が味わった寂寥感とそれを乗り越えて奥様の介護をしていってほしい強さ、そこをきちんと手当てすれば、ものすごいエンパワーになり、ご主人の力が湧いてきます。そして援助職者との信頼関係も確かなものになります。

Tさん ありがとうございます。ご主人がご自分の気持ちを訴えられたのが、なぜ最後の最後、2年も経ってからだったのかがずっと引っかかっていたのですが、その理由がよくわかりました。

奥川 大切な点に気がつきましたね。一足飛びに今のようなレベルの援助をしろとは言いません。

ただ、こういう深い理解と援助も可能だということを知っておいてください。

Tさん はい。

自己決定をどう促すか

奥川 では、もう一つのテーマ、ご夫婦の自己決定をどう考えればよいかという点についてみていきましょう。まず、このご主人は自己決定をする力をお持ちでしたか？

Tさん 介護による疲労はありましたが、判断能力等はしっかりされていました。

奥川 そうですね。このケースの場合、夫の判断力はしっかりしています。しかし、妻は難しい。この二人をセットでクライアントと考えたとき、どのように自己決定をしてもらえばいいと思いますか？

Tさん う〜ん……。

奥川 皆さん、アイデアを出してあげてください。

発言 私が担当ケアマネであれば、まずご主人の持病がどういう状態なのかを専門家から説明してもらい、ご自分の状態を認識していただきます。そして、奥さんに対して愛情をもっていらっしゃることを手当てしたうえで、今後の将来像として奥様の異常行動等が発生する可能性などを説明し、奥様の状態やご自身の体調などからご自分で介護ができなくなった場合、奥様にとって一番よいことは何かをご主人に判断していただきたいと思いました。

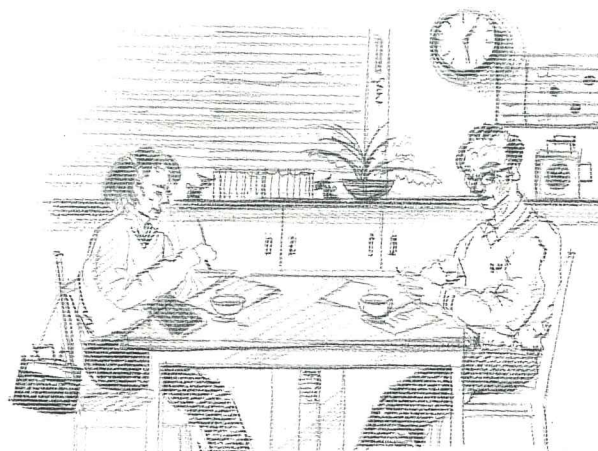
奥川 気持ちの手当てをしながら必要な情報サポートを行い、ご主人に自己決定していただくということですね。いいですね。ほかにはいかがですか？

発言 私もほぼ同様ですが、初回面接の場で判断するのは難しいと思いますので、お二人で少し話し合っていただく時間をとりたいと思いました。

奥川 そういう配慮も大切ですね。参考になるアイデアをいただくことができましたね。

Tさん はい、ありがとうございます。

奥川 では、最後に今日の感想をどうぞ。



Tさん 本当の自己決定をしていただくためには、その前に土壌を整える必要があること、そして土壌を整えるためには、ご主人のしてきたこと、ご夫婦の絆を認めることが必要だったということがよくわかりました。さらに、それができなかったのは私自身の価値観が影響していたことに気づくことができました。また、初回面接のなかに援助を展開するポイントがあったことを教えていただきました。

奥川 たくさんの気づきがありましたね。まだこのケースは継続中なんですよ。

Tさん はい。ご主人は今、自分で奥さんの入所を決めたものの、すごく揺れているところです。

奥川 そんなご主人に、どう言葉をかけますか？

Tさん ご主人はこれまで一生懸命努力してこれられ、奥さんのことを思う気持ちから入所を決められたこと、そして奥さんのためにもご自分の身体を大切にしていっていただきたいことを、私なりの言葉で伝えたいと思います。

奥川 心から伝えられそう？

Tさん はい、伝えられます。

奥川 ああ、よかったですね（会場から拍手）。今日はTさんの事例から大切なことを勉強させていただいたと思います。皆さんも自らの実践と照らし合わせながら、ご自分の振り返り作業の参考にしていいただければと思います。お疲れさまでした。

Tさん&会場 ありがとうございます。